



TITLE:

リカアドオの経済學體系

AUTHOR(S):

岸本, 誠二郎

---

CITATION:

岸本, 誠二郎. リカアドオの経済學體系. 經濟論叢 1956, 77(5): 345-372

ISSUE DATE:

1956-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/132473>

RIGHT:

# 經濟論叢

第七十七卷 第五號

---

リカアドウの經濟學體系……………岸本誠二郎（1）

新中國における人民幣デノミネーション

について……………三 木 毅（29）

マルクス＝エンゲルスのイギリス革命論(1)……尾崎芳治（45）

ゲオルク・ルカーチ「若きマルクスの

哲學的發展について（1840—1844年）」……平井俊彦（62）

---

〔昭和三十一年五月〕

京都大學經濟學會

# リカアドオの經濟學體系

岸 本 誠 二 郎

## 一、「經濟學原理」の章別編成

リカアドオは、經濟學の全體的な體系的敘述を行わず、個別の重要問題に適切な説明を與えることに研究の重點をおいた。これはまず理論を體系的に示し、次に個々の問題解決に進むという方法をとらず、個々の問題解決を比較的直接的に行つたからである。價值論は、個々の理論を體系化する効果をもつものであるが、これもリカアドオの場合には、マルクスの價值論のような一般的敘述から出發せず、價值尺度の解決に重點をおいて展開された。

「經濟學および課税の原理」は彼の主著ではあるが、その各章の説明は、必ずしも前章が後章に圓滑に發展しているとはいえない。ロールも次のように述べている。

『「原理」の構造は、リカアドオ自身の興味と調和していない。議論は、しばしば不手際にならされている。第一章では觸れ足で論述された使用價值と交換價值との區別が、形をかえて第二十章全體を占めている。リカアドオの有名な地代論を含んでいる第二章および第三章は、スミスおよびマルサスの見解を論駁した後の方の數章によつて補完される形となつてゐる。價格、供給、需要および外國貿易に關する議論は、ばらばらに數章にわたつて散在している。第五章および第六章に論述されている賃金

および利潤は、機械について論じた終りから二番目の章(第三版で附け加えられた)でさらに立入つて説明されている。そして、不相應に多くの章で、附け足した課税の問題が取扱われている」と。

1) D. E. Roll, A History of Economic Thought, 1946, p.178, 岡谷三喜男譯、經濟學說史、上、二二八頁。

これは、彼に體系的敘述が缺けているということ、彼の經濟學に特定の體系がないのではない。經濟上の澤山の重要問題を説いたについて、彼自身としては一貫したもの、體系的なものをもつていたと考えられる。その所説は、その場かぎりのばらばらの理窟でなく、彼なりに一貫しており、全體として一定の體系の上に立つている。それではリカアドオの經濟學體系はどのようなものであつたらうか。

まず「經濟學原理」の章別をみると、第二版では三十一章からなり、最終版となった第三版では一章加わつて次の三十二章となった。

一、價值について、二、地代について、三、鑛山の地代について、四、自然價格および市場價格について、五、賃金について、六、利潤について、七、外國貿易について、八、租税について、九、粗生生産物に對する租税、十、地代に對する租税、十一、十分の一税、十二、地租、十三、金に對する租税、十四、家屋に對する租税、十五、利潤に對する租税、十六、賃金に對する租税、十七、粗生産物以外の他の諸商品に對する租税、十八、救貧税、十九、貿易路における急激なる變化について、二十、價值と富、それらの特性、二十一、利潤および利子に及ぼす蓄積の諸結果、二十二、輸出獎勵金および輸入禁止、二十三、生産獎勵金について、二十四、地代に關するアダム・スミスの學說、二十五、植民地貿易について、二十六、總收入および純收入について、二十七、通貨および銀行について、二十八、富國と貧國における金、穀物および勞働の比較價值について、二十九、生産者によつて支拂われる租税、三十、需要と供給の價格におよぼす影響について、三十一、機械について、三十二、地代につ

てのマルサスの意見、

「經濟學原理」の諸章の性格あるいは位置については、從來諸學者によつて研究されている。いまそれについてみよう。

ド・クインシイは、リカアドオ經濟學の基礎理論として、三十二章中から租稅論に關する十四章——第八章から第十八章までと、第二十二章、第二十三章および第二十九章を加えた十四章——を除き、残り十八章をさらに二つに分つて、原理的あるいは肯定的部分と論争的あるいは否定的部分とする。そして租稅論の部分は、彼の一般原理から導き出される系論であり、一般原理の注釋にはなるが、一般原理が租稅論で説かれるところに依存しない。

またリカアドオの著述では、すべての部分が潜在的に論争的な参照をもつが、しかしあるものは他のもの以上に直接的に、かつ形式上も論争的である。これらもすべて一般法則からの系論であつて、一般法則の前提となるものではない、というのである。彼が肯定的と論争的の諸章というのは、次のようである。

肯定的諸章は、第一、四、三十章の「價值について」、第二、三章の「地代について」、第五章の「賃金について」、第六章の「利潤について」、第七章の「外國貿易について」、第十九章の「貿易路の急變について」、第二十一章の「蓄積について」、第二十五章の「植民地貿易について」、第二十七章の「通貨と銀行について」、第三十一章の「機械について」、であり、論争的諸章は、第二十章の「價值と富について」はスミス、ローダーデル、セイに對し、第二十四章の「地代」はスミスに對し、第二十六章の「總收入と純收入」はスミスに對し、第二十八章の「金、穀物および勞働の諸關係」はスミスに對し、第三十二章の「地代」はマルサスに對するものである。これらの論争的諸章を除くと、残る十三章が肯定的積極的諸章である。このうちただ通貨に關する第二十七章だけが、他の諸章と

は異なるものである、といふのである。

1) T. De Quincey, *Dialogues of Three Templars on Political Economy*, 1824, *The Collected Writings of T. De Quincey*, Vol.

IX pp.52-54

スラッファもリカード「經濟學原理」の諸章を分つて三部とし、經濟學、租稅論および論争的諸章とする。もつともスラッファはこれを具體的に指摘してゐない。

1) *The Works of Ricardo*, Vol. I, editor's introduction pp. xxi-xxiii

たしかに論争的諸章はあり、例えば第二十四章、第二十八章、第三十二章は明らかにそれであり、また第二十章、第二十一章もそれに屬すると思われるが、この二章は單純に論争的諸章にとどまらず、彼の理論はここに積極的に展開されている。すなわち第二十章はスミス、ローダーデル、セイの見解に對する批判であるが、單純な批判以上にリカードは價值との關係の理論を、第一章よりも發展せしめている。第二十一章にしても、これはスミスの利潤率低下論の批判の形をとつているが、ここでは資本蓄積論が展開されており、これは他の諸章ではいまだ説かれなかつたところで、ド・クインシーもこの章を肯定的諸章に入れてゐる。第二十六章をド・クインシーは論争的諸章に加えているが、ここにも收入に關する積極的見解が述べられている。

マルクスはリカードの「經濟學原理」を詳細に検討して、その敘述がごた混ぜで、構造の上で、求めるものがないこと、そして全三十二章のうち最初の六章の重要性を強調した。これはマルクス經濟學からいへば當然なことであつて、この六章もその理論を追求すれば、最初の二章に集約されるのである。第三章は直接に第二章の一節にすぎず、第四、五、六章も最初の三章に「前提されているばかりでなく、さらに完全に展開されている」と解され

た。しかし最初の二章における敘述は極めて重要であつて、リカアドオはこれによりスミスと斷然決別し、發展した資本主義的生産過程を、したがつてまた發展した經濟學の諸範疇を、その原理たる價值決定と對質せしめたと説いた。<sup>1)</sup>

1) Marx, Theorien über den Mehrwert, II, 1. 5. Aufl. SS. 5-9, 改造社版、全集、九卷、一九一三頁

シュンペーターも、リカアドオの基本原理は最初の二章に示されていることを説き、第三版の機械論は基本原理の重要な補足であり、その他では實際に第三章ないし第六章は發展であり、第八章ないし第十八章および第二十九章は、すべて租税に關する應用であり、第二十、二十一、二十四、二十六、三十、三十二の諸章は辯明と批判であるばかりでなく、不幸にして拾ひ讀みするのは非常に危険なような、基本原理に對する多くの餘論が含まれている。例えば「通貨と銀行について」の第二十七章は、第二十八章とともに、リカアドオの一般理論の研究者が看過しがちの問題を扱っているが、これは限界費用が價格に等しいという定理についてのリカアドオの取扱いと、彼がそれを十分に物にしていた感覺について、多くの必要な光明を注ぐ文句を含んでいる。第七章の外國貿易論も、基本原理に對する補論であり、これはさらに第二十二、二十三および二十五章によつて補論されており、第十九章は、さらにある意味で第二十一章も、セイ法則へのリカアドオの臣服を誓うものである、と説いている。<sup>1)</sup>

1) J. Schumpeter, History of Economic Analysis, 1954, p. 476.

リカアドオ經濟學の原理上の重心は、たしかに最初の二章にあり、そのうちに後の重要な理論、例えば利潤論などが含まれていて、各章の敘述はごたごたし、章を追うて體系が展開されてゆくというものではない。だから彼の經濟學體系は、結局彼の説いた全體を通じて理解しなければならぬのである。

リカアドオ經濟學のように、その體系が明確に示されていないものでは、その經濟學の形成過程をあとづけることによつて、體系を求めることは、有效な方法であらう。パテンのリカアドオ體系論はこの種のものである。彼の説くところでは、リカアドオの研究は最初、繁榮論に重點があり、後、次第に分配論に發展した。この過程は三つの時期に分たれる。第一の時期はマルサスの地代論の發展される以前に書かれ、單純に彼自身の興味によつて研究された段階である。彼は地代を利潤ならびに賃金と並置せず、かくして分配論の基礎を意識的に破つてゐる。この時期の彼の思索の形態は、價值と繁榮(富)に關する議論のうちに示されてゐて、「原理」中の次の諸章は、同時代の經濟學者達と接觸することによつて修正される以前の、彼の經濟學體系の核心を含むものである。すなわちそれは第二十六章「總收入と純收入」、第二十章「價值と富、それらの特性」、第二十八章「富國と貧國における金、穀物および勞働の比較價值について」、第五章「賃金について」、第二十一章「利潤と利子に及ぼす蓄積の影響」の諸章である。その順序は、もとよりこれが書かれた順序でなく、また彼の書物に現われている順序でもない。記述にあつては、彼は現在の最大の關心より出發し、後に彼に現われてきた諸章を、あるいは當時の經濟論争によつて提示された諸章を、追加したようである。このようにして彼の注意が最初に向けられた論題のあるものは、書物のうちには後に現われている。しかしこれらの諸章において、彼は明らかにアダム・スミスの影響を示している。スミスの諸著述は、各々の特殊な點の議論の出發點であり、従つてリカアドオは彼の位置とスミスの位置とを對照することにより、進んで彼自身の思想を發展せしめてゐるという。

第二期は、貨幣と外國貿易に關する部分を含む。これらの議論においてリカアドオは、彼自身の經驗と觀察内の諸事實に基礎をおいた本來の研究から推論してゐる。ここに純粹のリカアドオがいる。貿易と商業の熟知した諸事



實は、他の産業現象から隔離されて、それらがそれ自身の完全な産業世界を形づくるかのごとくに扱われている。それらはしかし特殊な、具體的な、そして繪のようなものであり、一商人あるいは銀行家の書物から見られるような世界の繪を示している。大膽な推論が、その結果において幸福であるような、これらの特殊な場合からなされている。けれど全産業世界は、當時、銀行家や貿易業者が以前歩んできた線に沿うて動いているから、というのである。

第三期は、マルサスによる地代論の發見によつて生じた。この影響のもとに、彼は食糧價格に對する利潤の關係の彼の法則の性格を、特殊法則から一般法則に變え、従つて彼の議論を地代法則の上に基礎づけることにより、彼の利潤論を改訂した。彼の基本命題に對する彼の議論上のこの變化は、おのずからリカアドオの注意を繁榮論から分配論に轉じたのである。利潤論は、思うに彼が現在の形で考え抜いた最後の章であつた。そしてそこに彼は部分的に彼の觀察を、繁榮から分配に移したのである。彼の序文は、しかし書かれたすべてのうちの最後のものではあつた。そしてそのうちで彼は最後に分配の重要性を意識したので、それが「經濟學の主要問題」であると述べているのである。

パテンによると、體系的な著述家と體系的でない著述家は、序文の書き方がちがう。前者は書き始める前に、彼らの全計畫を考へつくしているのので、その序文は書物の内容を反映するものである。後者は、リカアドオのように何らの明確に意識した計畫なしに始め、でたために節から節に進み、しばしば書物の節を變更する。それゆゑにこのような書物の諸章が、實際に書かれた順序には、內的な檢證なくしては、何らの手がかりはない。第一章が最終章であつたり、最終章が第一章であつたり、また第一章と最終章とがともに書物の中程にあることもある。この種

の著述家は、この書物を書き終つたときにその序文を書く。しかしそれはその書物の序説でなく、彼の書いた最終章への附録であつて、他の適當な場所のなかつた半端物の、おそらくいくつかを収めているのである。リカアドオにおいては彼の序文は利潤の章の附録であつて、彼はこの利潤の章で記述を終り、そのうちに經濟學の後の發展で非常に重要となつた分配論を、ぼんやりと見せたのである。とバテンは説いた。

1) S. N. Patten, *The Interpretation of Ricardo, The Quarterly Journal of Economics*, April 1883, pp. 334-336.

以上のバテンの説くところのように、リカアドオ經濟學の形成過程をあとづけて、彼の體系を確かめることは、有效な方法である。そして繁榮論の課題は、リカアドオ經濟學において極めて重要なものであつたろう。しかしバテンの説くように繁榮論から分配論へ轉換したと解釋されるだらうか。分配論もバテンのいうように、未完成ではあつたけれども、リカアドオにとつて極めて重要な課題であるが、リカアドオにおいては分配論がそれだけのものとして説かれるよりも、古典經濟學の脊骨があつて説かれている。リカアドオは彼の經濟學を體系的に記述するに至らなかつたが、脊骨となる古典經濟學の體系的な理論をもつて、これを基礎にしてその時々の問題を説き論争も行い、繁榮論から分配論に進んだであらう。彼の論述は、「經濟學原理」ですら斷片的であるが、それらを検討してみると、一貫した體系的の基礎を十分にもつていたと考えられる。

リカアドオの體系を考えるについて、最もよりどころとなるはずの「經濟學原理」の諸章が、ごたごたしているので、まずこれを整頓する試みがある。ゴンナーは「原理」三十二章の配置替えをし、「原理」を讀む順序を整えることにより、體系的なものを示している。これによると、まず第一章「價值論」に第二十章の「價值と富」と第二十八章の「金、穀物および勞働の比較價值」を加え、「價值論」につづいて第二十七章の「通貨および銀行」、

第四章の「自然價格と市場價格」をならべ、この第四章に第三十章の「需要供給論」を加える。次に分配論が來り、第二章「地代論」第三章「鑛山地代論」この地代論に第二十四章「スミスの地代論」と第三十二章「マルサスの地代論」を加え、さらに第五章「賃金論」第六章「利潤論」となり、第六章に第二十一章「蓄積論」を加える。次に第七章「外國貿易論」とし、これに第二十五章「植民地貿易論」を加え、次に第十九章「貿易路の激變論」に第三十一章「機械論」を加える。後は租稅論の第八章、第九章、第十章、第十一章、第十二章、第十三章、第十四章、第十五章、第十六章、第十七章、第十八章、第二十二章、第二十三章をならべ、第十八章「救貧稅」に第二十九章「生産者の支拂う租稅」と第二十六章の「總收入と純收入」を加えた。

1) Ricardo, *Principles of Political Economy*, ed. by E. C. K. Gomer, *Introductory Essay*, pp. xvi-xxvii

ところで「經濟學原理」は價值論の章より始まる。分配論は價值論を基礎として展開されているが、第二章「地代論」は第三章の「鑛山地代論」をも含めて第一章「價值論」の連續であり、價值の本論に對する補論の第一である。第二章の劈頭の書出しも「しかしながら……（以下の點について）考察すべき問題が残っている、」となつてゐる。リカアドオの「經濟學原理」の原稿は、最初章別なしに書き通され、章別は執筆を終つてから後、ところによつては印刷中の校正刷をとりながら加えられたもので、第二章「地代論」の記述は第一章「價值論」に直結してゐたと思われ。地代論の劈頭に考察すべき問題というのは、やはり價值に關するものであつて、地代が発生すると、そのことが生産に必要な勞働量とは別に、商品の相對價值に變化を生ずるであらうかということである。この問題を解くについてリカアドオは地代の本質とその騰落を支配する法則を研究するといふのである。この研究の結果、リカアドオが到達した解答は、農産物の相對價值もその生産に必要な勞働量によつて決定するのであつて、

地代が発生しても、それによつて變更を蒙ることはないというのであつた。すなわち「原生産物の比較的價值がなげ騰貴するかという理由は、それが得られる最終部分の生産に一層多くの勞働が投ぜられるからであつて、地主に地代が支拂われるからではない。」「穀物は地代が支拂われるから高いのではなく、穀物が高いから地代が支拂われるのである」と説かれた。<sup>2)</sup>これより地代の發生を考慮に入れても、價值の原則は貫かれることが明らかにされた。

1) cf. The Works of Ricardo, I, editor's introduction, pp. xxiii-xiv,

2) The Works of Ricardo, I, p. 74, 小泉信三譯(上)、六四頁

第四章「自然價格と市場價格」も、價值の本論に對する第二の補論である。價值の原理的説明は、一般に價格の長期的傾向を示すが、これは現實に短期的一時的變化が現われることを妨げないということが、補論されているのである。すなわち商品の價值が、その生産に必要な勞働の相對量によつて決定するという原則をたてるについて、「われわれは諸商品の現實價格あるいは市場價格がこの、その本來的自然的價格からの偶然的一時的偏差を否定すると思われてはならない」と第四章を説き起している。

1) cf. The Works of Ricardo, I, p. 88, 小泉譯(上)、八〇頁

第四章は價值法則の貫徹を明らかにするのに、競争を通じて市場價格が自然價格に一致することを説くが、これは後の理論發展に二つの重要な契機を與えている。その一つは、ここで平均利潤率を説くことにより、第六章「利潤論」に連なり、その二は、競争による市場價格の變動を説くことにより、第三十章の「需要供給論」に連なる。第十九章の「貿易路における激變」も、競争に關する問題としてここに連なるものである。

分配論は價值論を基礎とし、その發展として説かれている。そのうち、まず地代論は價值論に直續し、その補論として第二章で説かれた。地代は農産物の價格形成の結果として生ずるものであつた。

賃金は、第四章の「自然價格および市場價格について」につづいて第五章で説かれ、一般商品の自然價格と市場價格に對し、その特殊の場合であり、從つてこれを通じ價值論に結ばれている。原稿整理についてのスラフファの考證によつても、第四章と第五章はもと同一章であつた<sup>1)</sup>というが、これは理論上も推論しうるところである。

1) cf. The Works of Ricardo, I, editor's introduction, pp. xxv-xxvi

利潤論は賃金論に續いて、第六章で述べられている。リカアドオの利潤論は、利潤率平均化論と利潤率低下論を内容とし、前者は上述のように第四章「自然價格および市場價格論」において説き、第六章は利潤率低下論を主とし、次のように説き起している。曰く、「種々な用途における資本の利潤が相互に比例を保ち、またすべて同じ程度に、同じ方向に變動する傾向を有することはすでに示されたから（これは第四章で）、われわれに残るところは、利潤率の永續的變動、およびその結果生ずる利子率の永續的變動化の原因が何であるかを考察することである」、と。これは内容上も賃金論に直結する。というのは利潤率の永續的低下の原因は、賃金の永續的騰貴にあると考えられているからである。

ここで注意すべきことは、リカアドオの利潤論には、利潤の本質あるいは源泉が説かれていないことである。これは昔からリカアドオ研究者の間において議論されているところである。利潤はすでに價值の成立を説くのに前提されているのであるから、後に至りどこにも利潤の成立を説く場所がないわけである。そこで重要になるのは、再生産論のうちにおける分配論の位置である。リカアドオの利潤論は分配論の結論的部分であるが、分配論を價值論

の上において説くことは、分配論の結論とされている利潤變動論を、再生産の過程のうちにおいて規定することになければならぬ。これは資本主義的再生産の過程において形成される剩餘價值、すなわちリカアドオのいわゆる純収入と、それに對比される總収入の問題として、不完全ながら第二十六章に現われている。この第二十六章は分配論につづいて扱われるべきであつたろう。

第七章の「外國貿易論」は、リカアドオの價值法則を基礎とする理論體系では、限界の問題となつてゐる。價值法則は、商品ばかりでなく、資本と勞働とが自由に移動しうるところの國民經濟内において、そのまま實現するのであるが、資本と勞働とが自由に移動しない國際間にはそのまま實現しない。この國際關係の場面では勞働價值法則はどうなるのか。なくなるのか、歪んで現われるのか。それぞれの國において勞働價值法則が行われることを説いたのだから、それが國際間の貿易において、どのような形をとつて現われるかが、研究されなければならぬのだが、リカアドオの外國貿易論では、この場面においては勞働價值説が消滅すると説かれ、これは後世の研究に残されたわけである。いずれにしてもリカアドオの價值法則からいえば、これは應用上の問題であつて、マルクスもこの第七章は、第二十五章の「植民地貿易について」とともに、前に樹立された原理の單なる應用にすぎないと述べている。

第八章以下の租稅論の長い敘述は、原理論の具體的、政策的な應用問題の研究である。

リカアドオの貨幣論は體系上明確でない。ド・クインシイは、第二十七章「通貨と銀行について」は、經濟學の他の部分から隔離されていると述べ、マルクスも全く孤立していると説いている。彼の經濟學研究は貨幣問題から始められたが、貨幣論は體系的敘述なくして終つた。彼の研究の結果は實物的關係に重點がおかれて、いわゆる貨

幣的分析ではない。貨幣論の位置について、價值論は貨幣論の基礎になつていなければならぬが、マルクス經濟學の價值形態論にあたるものはない。マルクスはこの點について、「リカアドオは價值を決定する勞働と貨幣との關連を、したがつてこの勞働が貨幣として現われなければならぬということを理解しない。彼は、したがつて商品の交換價值が勞働時間によつて決定されるということと、貨幣形成にまで進んでゆく商品の必然性との間の關連を全く理解しない。リカアドオの誤つた貨幣論は、ここから生ずる」と説いている。リカアドオにおける貨幣價值の決定は、勞働價值説による地金の價值決定と、貨幣數量の増減による價值の騰落の二方法によつて行われ、これが一般商品の自然價格と市場價格との關係と同じ事情におかれている。

1) De Quincey, op. cit. p. 54, Marx op. cit. S. 5,

2) Marx, op. cit. S. 1. 改造社版、全集、第九卷、一五頁。

最後に、後世に重大な問題を殘した第三十一章「機械について」は、他の諸章といかなる關連を有するであろうか。マルクスはこの章をもつて第五章の「賃金論」と第六章の「利潤論」の單なる付録にすぎないといっているが、これはなるほど直接には勞働力の需要の問題としてこの二章に結びつけられども、資本構成の變化を中心とした全體的な再生産の問題として、價值論と離しえない部分である。ゴッナーは「機械論」の章は第十九章「貿易路における激變」の次におかるべきことを説いている。第十九章にはすでに新しい機械の採用の影響を説いているから、第三十一章と關係はあるが、前者では主として資本の自由移動の可能不可能より生ずる問題を扱い、需要供給論に縁の深いものであるに對し、後者では資本構造の變化に重點がおかれ、再生産に直接の關係を有すると考えられよう。

## 1) Ricardo, Principles, ed. by E. C. K. Gomer, editors' introductory Essay, p. xxvi,

リカードの「經濟學原理」の主要な諸章は、以上のような關連をもつていと思われるが、これらの諸章を順を追つて跡づけただけでは、體系的なものとは理解されない。しかし彼の經濟學全體を見渡すと、そこに一貫した體系的なものがあつたことは否定できない。それは分配論體系ではない。分配論は彼の最大の研究課題であつたが、彼の經濟學體系は分配論の體系につきるものではない。彼の經濟學研究全體を通じて、こうもあつたであらうと思われる理論體系はどのようなものであつたであらうか。

## 二、リカード經濟學の體系化

リカードの經濟學體系は、産業社會の發展法則を中心とした生産力の自己運動の、動態的體系である。

リカードでは、經濟活動を起させる究極の事情は、富の生産にある。富の生産を規定する人間的事情は、價值法則である。富と價值は嚴別されなければならぬ。これは「經濟學原理」第二十章に詳しく説かれている。人の貧富、富の程度は、スミスのいうように人間生活の必需品、便利品および娛樂品を享受しうる程度いかによつて定まる。これに對し價值は豊富によつて定まるのでなく、生産の難易によつて定まる。製造業における百萬人の人間の勞力は、つねに同一の價值を生産するが、しかし必ずしも同一の富を生産しないであらう。機械の發明により、熟練の進歩により、よりよい分業により、あるいはより有效な交換の行われるような新市場の發見によつて、社會のある狀態のもとにおける百萬人の人間は、他の狀態のもとにおいて生産しうるべき富、すなわち「必需品、便利品および娛樂品」の二倍または三倍の額を生産するかもしれぬが、しかし價值はそのために少しも増加しないであ



ろう。何となればあらゆるものの價值は、その生産の難易に比例して、いいかえればその生産上に使用される勞働量に比例して騰落するからである。

國富は個人の富の總計であるから、社會全體の享受する商品量が同一であるならば、ある個人がそのより多くを獨占することは、その個人の富を増加せしめるが、それだけ他の人を貧しくするにすぎない。

國富を増進するには、二つの方法がある。第一は、収入のより大なる部分を生産的勞働の維持に使用することによつて増加される。これは單に商品の數量を増加させるばかりでなく、その價值をも増加させるであろう。第二は、追加勞働量を使用することなく、同一量の勞働を一層生産的ならしめることによつて、増加させるのである。これは商品の豐富を追加するが、その價值は追加しないであろう。

この二つの方法は、再生産の進行に異なる效果を生ずる。第一の場合には、一國は富むようになるが、その富の價值もまた増加するであろう。その國は儉約により、その贅澤品と享樂品に對する支出を減少せしめることにより、そしてそれらの貯蓄を再生産に使用することにより、富むようになるのである。

第二の場合には、必ずしも贅澤品や享樂品に對する支出の減少も、使用せられる生産的勞働の量の増加によることもなく、ただ同一勞働をもつて、より多くのものが生産せられるであろう。富は増加するであろうが、價值は増加しないであろう。富を増進せしめるこの二つの方法のうち、後者は第一の方法に必ず伴わざるをえない缺乏と享樂の減少なくして、同一の結果を生ずるであろうから、これを優れているとしなければならぬ、とリカアドオは考へた。

1) Ricardo, *On the Principles of Political Economy, The Works*, Vol. I, pp. 273-278, 小泉譯 (下)、七一—一三頁。

ここにリカアドオは國富の増進というスミスの課題の解決をとり上げ、勞働生産力、價值と使用價值、再生産の理論を體系的に展開しているが、これはおのずから資本ならびに資本蓄積の理論に發展するわけである。

リカアドオによれば、資本とは一國の富のうち將來の生産を目的として使用せられる部分であつて、富と同一の方法をもつて増加せしめうるものである。追加資本は、それが熟練と機械における進歩によつて得られたと、より多くの収入を再生産に使用することによつて得られたとを問わず、將來の富の生産において等しく有效であらう。

富の増進が資本主義的に行われるについて、資本蓄積は上の二つの方法によつて行われるであらう。リカアドオは「原理」第二十一章においてこの資本蓄積を、利潤および利子との關係の點より説いている。ここでは普通に資本蓄積の調和的進行が、セイ法則の是認によつて説かれていることが注意せられるのであるが、セイ法則はスミスの利潤率低下論の批判として持出されていることを看過してはならぬ。

スミスの見解というのは、同一産業内においても、同一社會内の諸種の産業の間においても、資本蓄積が増進すると、競争が激しくなり、利潤率は低下する傾向を生ずるというのである。これに對しリカアドオの主張は、賃金を騰貴せしめる何らかの永續的原因がないかぎり、資本蓄積は永續的に利潤率を低下せしめるものではない、といふにある。セイ法則は、これとの關連において是認されているのである。スミスは賃金の永續的騰貴を無視して資本蓄積の進行を説いているが、それでは利潤率は低下しない。資本が増加すると同時に、資本によつて果される仕事もまた同じ比例をもつて増加するので、この點ではセイの説くごとく消費と生産、需要と供給は調和し、國內において使用しえられぬ資本額はなく、資本蓄積は矛盾なしに進行するのである。リカアドオがセイ法則を是認する

のは、賃金の永續的騰貴を無視して説かれた利潤率低下論に對するものであつて、リカアドオとしては利潤率低下を説くのに、賃金の永續的騰貴を強調していたのである。また實際彼は賃金の騰貴により、利潤率の低下傾向を説いたので、セイ法則そのものを無條件に重要視したわけではない。生産と消費の調和を認めたといつても、現實には資本蓄積とともに、賃金の騰貴により利潤率の低下は進行するので、これは靜態的均衡でなく流動的均衡、しかも一定の傾きをもつた流動的均衡であり、またそれは無限の進行でなく、一定の限界が認められていた。

1) Ricardo, op. cit. pp. 289-293, 小泉譯、(下)、二二二六頁。

資本蓄積の矛盾は、後さらに再検討を要する問題となつた。これは機械論の問題であつて、資本蓄積が進み、機械が採用され改良されて、資本構成が變化することより生ずる矛盾的效果に關するものである。この研究は一九一七年の「原理」の執筆のときにはなされておらず、一九二二年のその第三版出版のとき、第三十一章「機械について」として追補されたところで、これは元來第二十一章につづき、資本蓄積の問題のうちで説かるべきものであつた。

以上のようにリカアドオ體系の基盤は、生産論であつて、これは古典經濟學の傳統であるが、リカアドオは價值論を確立することにより、この傳統的基盤を不動のものにした。分配論はこの基盤の上に築かれたのである。

リカアドオの分配論は、賃金と利潤の相反關係論を骨子とする。地代を生じない限界土地における農産物價值は、賃金と利潤とに分配され、この兩者は相反關係に立つ。これはもとより價值形成を前提とし、再生産の枠のうちに動態的に現われるのであるが、リカアドオ理論はこの單純な分析に重點をおいている。この分析に重點をおいているというのは、賃金と利潤の相反關係が彼の分析の結果確かめられたにとどまらず、これが複雑な現象の最も有效

なる分析用具として、しばしば利用されているからである。いわゆる「リカアドオ分析」の焦點はここにある。リカアドオがスミスやマルサスに對して、最も強く主張したのはこの分析であり、またこれよりばらばらなりカアドオの敘述を體系化する効果が生じたのである。この點よりリカアドオの「原理」は形式上體系的でないといへ、それは實質上第一級の體系的仕事であるとシェンペーターも評している。これは今日の所得分析における消費と貯蓄の關係の分析に對應する。兩者の分析はそれ自身異なる意味を有するが、それ以上にリカアドオ分析は價值論を前提していることは看過できないところであり、これがリカアドオ分析を本質分析たらしめているのである。

1) J. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, 1954, p. 474.

リカアドオは、たしかに分配論の重要性を強調し、分配理論を詳細に展開している。「經濟學原理」は最初「地代、利潤および賃金の原理」(The Principles of Rent, Profit and Wages)として執筆されはじめた。しかしこれが進められるにしがたい、價值論の解決に骨折らざるをえず、一度び價值論が確立すると、分配論は價值論の生産論的基礎から説くことになり、分配論以外の問題も説かなければ、研究を完了することができず、ついに「經濟學および課税の原理」となつたのである。ここに至つても、分配論の重要性は見失わなかつたが、リカアドオが分配論をなぜに特に重要視したかという点、産業革命の後の段階、すなわちリカアドオの時代において、地主と資本家と勞働者の利害對立は、最も重大なる實際問題となり、その理論的解明を必要としたからである。原理論においても、リカアドオの問題提起は、實際の必要と關連をもつていたのである。しかしその解決は古典の傳統により、價值論から果されたのである。したがつてリカアドオ體系は單純に分配論のそれではなく、生産論の上に分配論を展開したものである。あるいはこの分配論は再生産論の一節であるといつてもよい。それはこうである。すなわち富

の増進という課題は、商品生産によつて果されるが、勞働生産力の増進とともに、使用價值と價値の矛盾が現われる。資本主義的商品生産が行われると、資本蓄積はそれ自身行詰るものではないが、この過程において農産物の商品價値は漸次騰貴し、これが分配上二つの重要な結果を生ずる。その一は地代の騰貴であり、その二は賃金の騰貴であり、それはひいて利潤率の低落という結果を生ずる。これがリカアドオ經濟學において重要な分配現象であるが、それは再生産、資本蓄積の進行とともに現われるのである。この體系的關連から切離し、分配論をそれ自身としていわゆる三位一體的方式によつて説くことは、リカアドオの企てたところではない。

リカアドオの經濟學を、分配論もろともに流通論の體系と解する見解も止しくない。これはまずリカアドオ價値論を稀少價値説と解することから出發する。アモンやカッセルなどのリカアドオ論が、それである。稀少というのは需要に對する供給の相對的稀少であつて、アモンのリカアドオ論ではリカアドオの價値、價格はこの稀少によつて決定すると解され、賃金、利潤および地代の分配も價格現象であり、したがつて稀少原理によつて決定すると解された。この解釋ではリカアドオ經濟學は單純に流通論の體系であつて、價格ばかりでなく、價値も分配もすべてこのうちに收められるのである。

1) cf. A. Anson, Ricardo als Begründer der theoretischen Nationalökonomie, 1924, S. 5. 阿部・高橋譯、八頁。

價値は一般に價格の本質的なものと解され、價格理論を探索して價値をさぐりあてようである。價値法則は價格を終局的に規定しているが、價値法則はそれ以上に生産的性質を有し、また分配をも終局的に規定しているのである。リカアドオも價格問題の解決のために價値法則をさぐりあてたが、價値の研究が發展せしめられ、ことに「原理」第二十章に至ると、價値の生産的性質を否定しえなくなつてゐる。

1) cf. The Works of Ricardo, I. editor's introduction, pp. xiv—xv

稀少價值説は一種の需要供給説であつて、リカードの研究努力は、むしろ勞働價值説によりこれを破り、基礎づけるところにあつた。價格について、需要供給關係できまるところの市場價格以上に、自然價格をも考へたのは、單純に需要供給の均衡でなく、勞働價值による生産上の規定を重要視したからである。

利潤と利子の取扱ひについても同様である。今日の經濟學では、經濟變動における推進力として利子率を重視するものが多く、貨幣論的經濟學、流通主義的體系を生じたが、リカードでは生産を基礎とする利潤が重視され、利子率は利潤の指標として扱われた。<sup>1)</sup>

1) Ricardo, On the Principles, Works, I. p. 296 et seq. 小泉譯、(下)、三〇頁以下。

リカードの經濟學體系は、勞働生産力の發展が生み出す諸事情を組織化したもので、したがつてその體系は調和的な靜態の體系でなく、發展的な體系である。セイ法則は、一般に批判されているように、單純商品生産の關係を示しているが、リカード體系では資本蓄積とともに、賃金の騰貴と利潤の低下とが背反的に進行する構造が描かれている。

ハロッドは現代經濟學の問題點からリカード分配論の動態論的性格に特に注意を向けている。彼の經濟學では、經濟學者の第一の仕事は、ある一時點において生産物が生産要素の間にどのようにして分配されるかを決定することとなく、生産物が生産要素の間にどのように繼續して再分配されてゆくかを知ることにある。そしてこの場合本來的な推進力は蓄積への傾向である、と述べている。<sup>2)</sup>

1) R. H. Harrod, Towards a Dynamic Economics, 1948, p. 16, 高橋・鈴木譯、二〇—二二頁。

しかしこの動態的進行には限界が考えられた。賃金は騰貴し利潤は低下しても、利潤が零になるほどには進まない。利潤がそれほど降るならば、資本家は資本を蓄積し、追加労働を需要して、生産を増進する意欲をもたなくなるであろうから、と考えた。<sup>1)</sup>すなわちこの段階に至ると資本蓄積も停止するのだから、ここに漸く靜態が現われるわけである。

1) Ricardo, On the Principles of Political Economy, Works I, p. 120, 小泉譯、(上)、一一六頁。

リカアドオが資本蓄積の「自然的傾向」を遮断したことは、理論上重大な意味を生ずる。生産力の自己發展は矛盾的内容をもつのであるが、それがここに至つて遮断され、矛盾のものはや發展しない靜態的狀態が出現するのであり、矛盾的、發展的構造は靜止的、永遠的體系に鎮靜されている。リカアドオの普遍的體系はここにあり、これはマルクスの歴史的發展の體系と異なるところである。リカアドオ體系では封鎖されたる動態、發展があり、發展は壁にぶつつける前に停止するのであるが、マルクス體系では發展は封鎖されておらず、資本蓄積の進行とともに生産力と生産關係の矛盾は擴大し、その破局により關係は辨證法的に逆轉し、搾取者が搾取される事態に展開されてゆく。リカアドオ經濟學も「陰鬱科學」であり、「悲觀論」の刻印をおされたといへば、資本主義的蓄積が自壞する<sup>2)</sup>と考えるほどに悲觀的ではなかつた。これは論理の必然的判斷というよりも、希望的觀察であり、ここに經濟の進行を固定化し永久化するところの非歴史的觀察の立場があつた。

リカアドオ經濟學を、通説のいうように單純に分配論あるいは流通論の體系としないで、再生産論の體系と解することは、リカアドオ經濟學のもつ「産業進歩の法則」<sup>3)</sup>あるいは「繁榮論」とも關係をもつ。この經濟學では、進歩的社會においては地代は騰貴し、利潤は下落し、賃金はほとんど同一點に靜止するといふのであるが、これは逆

に地位が騰貴し、利潤が下落し、賃金が靜止し、つまり分配關係がそのように變化することが進歩的だというわけではなく、資本蓄積が進み、生産が増進するから進歩的なのであつて、分配の變化はその進行のうちに現われるのである。リカアドオ經濟學は、經濟をこのような産業進歩の法則體系においてとらえたものである。

1) A. Toynbee, *Lectures on the Industrial Revolution*, 1920, p. 111.

リカアドオ經濟學の繁榮論的性格も、産業進歩の實踐的、政策的側面である。土地所有でなく、産業資本の伸長が社會の繁榮をもたらす所以だということは、單純な分配の問題ではない。社會の繁榮の内容として何よりも使用價值、富の増進ということが、價值論を基礎として説かれたのであつて、分配の問題はその後に出てくるのである。前述のように、リカアドオは繁榮論から分配論に移つたというバテンの説には疑問があるが、それが正しいとしても、價值論的基礎がすてられているわけではない。

リカアドオは、アダム・スミスの經濟學より學ぶところが最も多かつた。もとよりリカアドオはスミス以外の諸學者についても研究していたが、彼の經濟學の基礎をなしているのは、スミス經濟學であつて、彼は「國富論」より最も多くを學び、これを批判し發展したのである。リカアドオはまさにスミス學徒であつた。リカアドオ經濟學の體系を理解するにも、「國富論」の體系が大いに參考になる。

スラッファは「原理」の執筆の考證から、「原理」の第一章ないし第六章を「國富論」の第一編第五章ないし第九章と比較し、その類似を説いている。<sup>1)</sup>この對應はもとより偶然でなく、リカアドオの「國富論」研究より當然のことであるが、リカアドオはこの對應の箇所以外に、「國富論」の他の部分にも無關心であつたわけではない。ミスが得意とする歴史的な研究は、リカアドオは得意とせずこれに立入らなかつたが、理論上必要な部分はよく檢



討を加えた。「國富論」第一編の最初の三章には分業論を中心とした生産論が説かれているが、リカアドオは分業論こそ十分に播取していないとはいえ、生産についての必要理論は、價值ならびに資本蓄積の問題解決のうちで説いたのである。「國富論」の第四章には、交換ならびに貨幣の發達と價值の問題點が説かれているが、この價值の説明は第五章の價值論にただちに續くものとして、一體としてリカアドオの價值論の研究のうちに入り、彼の價值論は使用價值と交換價值の矛盾というスミスの問題提起から説き起されているのである。

1) *The Works of Ricardo, I. editor's introduction, pp. xxii—xxiv.*

リカアドオのこの研究の進め方は、生産論を抹殺したかの外觀を與えるが、決してそうでなく、むしろ價值論を確立することによつて、生産論の基礎を固めたのである。けだしスミスの價值論は明瞭を缺いたが、リカアドオはこれを授下勞働價值説に明確化することにより、價值の形成はそれ自身が生産の本質的なものとなつたからである。

分配論の重要度は、スミスとリカアドオでは異なる。スミスでは價格は分業的商品生産を基盤とする上層現象として現われるが、分配現象はそれに付屬して扱われ、したがつて分配論は「價格の構成部分」(第六章)の問題として説き起されている。價格は賃金、利潤および地代に分解されると説きながら、また價格はこれら三要素から構成されることも考えられ、分配論の價格論的色彩が強い。<sup>1)</sup>しかるにリカアドオにおいては、分配論の重要性が強調されながら、これが價值の形成から、それを前提にして説明された。分配要素、ことに賃金の價格的問題は、價值論の規定を前提とし、需要供給機構を説いた「自然價格と市場價格」の理論を媒介として説かれたのである。

1) cf. A. Smith, *The Wealth of Nations*, Cavan's ed. I, pp. 34—55.

リカアドオと對照されるマルサスの「經濟學原理」では、第一章で富ならびに生産的勞働を説き、スミスと同様に生産論より出發するかのごとくであるが、第二章で詳論された價值論では、價值は需要供給説で説明されることになり、その生産論的基礎は失われた。そのため最終章の生産論において、過少消費説により生産と消費の矛盾を説いたが、これは勞働と資本の矛盾というリカアドオの價值論的分析と對立することになった。分配論の位置については、すでに價值が、需要供給關係によつて規定されており、分配諸要素の規定も、物的生産力を前提して需要供給論に従屬せしめられた。これはスミスにおいて分配論が生産論的、價值論的性格のものであるか、それとも價格論的、需要供給論的性格のものであるかが曖昧であつたが、マルサスにより價值論におけるリカアドオとの對立の關係から、價格論的、需要供給論的性格のものとして明確化され繼承されたためだと考えられる。

ジョン・スチュアート・ミルはリカアドオ經濟學を繼承して、分配論の重要性を認めながら、價值論を十分に固めなかつたために、生産論と分配論とを全然性格の異なるものと考えて、すなわち一を技術的法則の問題、他を社會制度の問題として規定し、兩者を並置して體系をつくり上げた。

ところでリカアドオの經濟學體系は、極めて理論的だといわれている。それは簡單であり、歴史的變化を跡づけず、個々の現象そのものもつ理論を追求し、スミス經濟學にまつわる自然法思想を拂拭している。しかし彼は個々の現象が現實の關係においてもつ論理を、抽象し體系化したのであるから、この理論體系は現實の經濟を一般的に説明するものである。この理論は一般化された抽象なのだから、個々の具體的な事實を説明するのには、抽象の段階からそこに下降しなければならぬ。その意味ではこの理論も具體的現實の分析や説明の道具だといえるが、しかしこの理論は全く架空に案出された單なる道具ではない。リカアドオの理論は彼をとりかこむ具體的現實のも

つ理論を抽象化し一般化したものであるから、それ自身がすでにその説明になつてゐるのである。これはリカアドオだけでなく、ケネー、スミスなどの古典經濟學に共通し、今日の道具經濟學と對蹠的である。道具經濟學では理論は任意の假設に基づく分析手段であり、これが結びつけられて非現實的なモデルがつくられ、現實が記述されるのである。しかるにリカアドオなどの理論研究では、理論は理論で任意につくり、これによつて現實を記述するのでなく、理論を構成することが具體的現實を離れては行われず、理論はそれ自身がすでに現實の一般的説明になつてゐる。したがつてその用ゐる概念も、現實現象の本質に關連するものである。すなわち使用價值、交換價值、價值尺度、貨幣、固定資本、流動資本、地代、自然價格、市場價格、賃金、利潤、富、利子、總收入、純收入、需要、供給などの諸概念が使用されてゐる。リカアドオ經濟學を發展させたマルクスでは、價值以上に剩餘價值や、固定資本、流動資本以上に不變資本、可變資本の概念が用ゐられてゐるが、これはリカアドオ以上に本質に接近し、本質分析的な概念を必要としたからである。ただマルクスはこれらの概念が歴史的規定性を有するものであることを確認したが、リカアドオは現實的な概念を單純に一般化し、その歴史的制約を看過してしまつた。それにしても現實體の本質認識は直接的であり、確實であつた。ハロッドはリカアドオ經濟學を靜態論、動態論の今日の分析概念で律してゐることは上述したが、リカアドオは任意に抽象的な靜學、動學の概念をまず構想して用具とせず、現實現象のうちから靜止狀態 (stationary state) 進歩狀態 (progressive state) 退歩狀態 (retrograde state) を認識し、この概念によつて分析を進めてゐる。經濟學體系にしても同様である。まず經濟循環の一般的モデルを構想し、それによつて經濟の全體を體系的に記述するのでなく、現實の價格關係から價值を搜りあて、そこから生産力の發展過程を明らかにしてゆくの、經濟學體系はこの經濟分析の追求からおのずから生れたのである。理論の道具だて

は、現實分析からおのずから生れたものであり、必要以上の道具は用意しない。道具はつねに必要なための道具であり、現實を離れた道具のための道具はない。リカードオ經濟學は極めて抽象的であるが、理論のための理論ではない。

1) Ricardo, On the Principles, Chapt. XI.

リカードオの用いた道具は極めて簡單であり、その描いた體系も餘りにも簡素であつた。これは今日の複雑な理論にくらべると幼稚に見えるかも知れない。それから學ぶべきものはないのであらうか。

ステイグラールはリカードオなどの古典經濟學について次のように述べた。曰く、

「われわれ近代經濟學者は、古典經濟學から學ぶべきものをほとんど見出さないということは、もとより自己禮讃の理由であるかもしれない、われわれは修業時代に、今日も遡つてスミスを読まされて愉快になり、またリカードオを読まされて苦痛になり、またミルを読まされて豫言的感情の少ないことを感ずる。しかし古典經濟學は、今日、古典語に對するある種の代用品となつてゐるようである。われわれは博識を得るかもしれないが、得ないかもしれないが、通常われわれは古典經濟學からわれわれの工作技術について、ほとんど何も學びえないという確信を得るのである。

「何となればそれらの尊嚴すべき人たちは、いかにも知るところが少なかつた。彼らは、限界收入と限界費用、限界生産物と限界性向、限界效用と限界代用率について知らなかつた。彼らは、デカルトがすでに死んで久しいのに、人は經濟圖表を描きうることを知らなかつたし、ニュートンやライブニッツが、彼らの研究をなしたのは遙か以前であるのに、微分學の熱で經濟學のエッセンスを蒸溜しうることを知らなかつた。缺陷はただに術語上や説明上のものでもなかつた。古典經濟學者は、企業や家計を分析しなければならぬことを知らず、また需要曲線が恐ろしく重要であることも知らなかつた。彼らは競争が不完全であり、獨占者は彼らの思うままに値をつけないことすら知らなかつた。われわれはいかに進歩したことよ、」と。

1) G. J. Stigler, *Five Lectures on Economic Problems*, 1949, p.25.

これは古典經濟學に對する思い切つた酷評である。古典經濟學は今日、これほどに無價値なものとなつてゐるのであらうか。その用具は簡單であるが、その築いた經濟學は、少くとも十九世紀の人々を指導したのはなぜであらうか。この經濟學を妄想とするには、餘りにもその影響が大きすぎる。ステイグラー自身も古典經濟學の研究を放棄しえず、この論文の後にりつばなりカアドオ研究を發表した。當面の問題の研究に忙しい學者ですら、古典の研究を無視しえないのはなぜであらうか。法隆寺の伽藍は美の極致を表現した結構であることには何人も異論はないが、この構築に用いられた用具は、まことに粗末なもので、飽すらなかつた。今日の高層建築もたしかにりつばであり、その構築に用いられる用具は、澤山の極めて複雑精密な技術であるが、それだからといつてこれらの用具を用いるならば、ただちに法隆寺の美が實現できるといふものではない。もとよりわれわれの問題は美の表現でなく、眞理の探求であるのだが、いわゆる分析用具が大切だとはいえ、用具だけで眞理がとらえられるものでないことは、美の表現の場合と同様である。つかむところをつかんだ理論體系ほど、恐ろしいものはない。

アモンは、一九二三年リカアドオ没後百年を記念して發表したリカアド研究の序文において次のように述べた。  
曰く、

「經濟學の分野において研究するものはすべて、彼以前になされ、あるいは彼のかたわらでなされているものに傾着しないで、彼自身の體系をうちたてるといふ習わしが、最近十年間に擴がつている。この習わしは斷たなければならない。耐久力のある學問的建築物は、一ダースの、あるいはそれ以上の學者が彼ら自身の體系を打ちたてるといふような方法ででき上るものではない。十二度も同じことが、しかもいつも幾分ちがつてたてられるということは問題でなく、すべての人が同じ建物で働く

ことが問題なのである。このことはしかし、各人がその分野で彼以前に働いた人々の肩にのり、また同時にその建物で働くすべての人々に手をさしのべるときは可能ではない。このような方法によつてのみ、われわれの分野においても維持しえられ、かつ同時に完成される建物が他日でき上るであらう。これに對する基礎はリカードによつて築かれている。それゆゑに各人はリカードとともに、そして彼の肩の上で建設はじめなければならぬ。われわれの問題分野における現代の課題は、新しさを競う體系製作屋の信じてきたように、リカードをおきかえることなく、彼の思想を理解し、かつ發展せしめることなのである、<sup>1)</sup>と。

1) A. Annon, Ricardo als Begründer der theoretischen Nationalökonomie, 1924, Vorwort.

今日、リカードの經濟學をもつて完璧だなどとなすものは、もとより存在しない。しかしリカードの經濟學は骨董品でなく、今日の經濟學の體系的研究において、これを十分に検討することは、絶対に必要である。われわれの研究努力は、これにとつて代るものを工夫することなく、これをふみ臺にし、これを發展せしめることにある。